

## 高校生における異文化体験と国際的資質の関連：海外研修旅行の効果

藤原健志<sup>1)</sup> 石井克佳<sup>2)</sup> 阪本康之<sup>2)</sup> 石田光枝<sup>2)</sup>  
塗田佳枝<sup>2)</sup> 北原立朗<sup>2)</sup> 飯田順子<sup>1)</sup>

本研究の目的は、日本の高校生を対象に、国際的資質が海外研修旅行における異文化体験へ与える影響を検討することであった。3か国のうち1か国を選択して海外研修旅行を経験した高校生158人に対し、国際的資質および異文化体験を測定する質問紙調査を実施した。その結果、旅行後の国際的資質が有意に高まったが、その効果量は低かった。また異文化に対する認識の肯定的変化は、旅行の結果高まったほか、旅行前の国際的資質に強く影響受けることが明らかとなった。教育効果の検証における個人要因導入の必要性について考察された。

キーワード：国際教育 国際的資質 高校生 国際研修旅行 異文化体験

The relationship between experiences of different culture and interpersonal disposition for high school students: The effectiveness of overseas school trip of high school students.

Takeshi Fujiwara<sup>1)</sup> Katsuyoshi Ishii<sup>2)</sup> Yasuyuki Sakamoto<sup>2)</sup> Mitsue Ishida<sup>2)</sup>  
Yoshie Nurita<sup>2)</sup> Tatsuro Kitahara<sup>2)</sup> Junko Iida<sup>1)</sup>

The purpose of this study was to examine the impact of international disposition on cross-cultural experiences in an overseas school trip among Japanese high school students. 158 high school students who participated in one in three foreign countries' trip answered the questionnaire regarding international disposition and cross-cultural experiences. The results showed that scores of international disposition significantly increased but the effect sizes were moderate. Positively changes of the realization toward other countries also increased and were positively influenced by international disposition before the trip. Application of individual factors to the examination of the teaching effectiveness was discussed.

Keywords : global education, international disposition, high school student, overseas school trip, cross-cultural experience

---

1) 筑波大学人間系 (附属学校教育局) 2) 筑波大学附属坂戸高等学校  
1) Education Bureau of the Laboratory Schools, Faculty of Human Sciences, University of Tsukuba  
2) Senior High School at Sakado, University of Tsukuba

## 【問題と目的】

文部科学省（2005）は、国際教育を「国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するための教育」と定義し、国際教育を取り巻く現状と課題、そして国際教育充実のための具体的方策について示している。その中で、国際教育が英語活動や単なる体験や交流活動に留まっている現状、国際教育に携わる教員の指導力不足、外部の人材や組織との連携不足、児童生徒の多様化（多国籍化や多文化化）、そして海外子女教育等の問題点が指摘されている。こうした問題を背景に、国際教育充実のための具体的方策として、各教科等の相互関連性を意識した授業づくりや学習内容・方法等の開発と普及、教師の実践力の向上、留学や海外研修旅行等の直接的な異文化体験の重視、外国人児童生徒教育の充実が挙げられている。

その中で、近年海外への研修旅行を通じて異文化体験を取り入れる学校が増加している。文部科学省（2012）によると、平成23年度、外国への3か月未満の研修旅行へ派遣された高校生は延べ29,953名となっている。同様に、全国修学旅行研究協会（2013, 2014）によると、この数値は平成24年度において32,047名、平成25年度においては37,452名に上る。しかしながら、こうした海外研修旅行にかかる1回当たりの費用負担は、公立高校では半数以上の学校が25万円以上、私立高校では半数以上が30万円以上とされており（全国修学旅行研究協会, 2014）、その負担額は大きい。国際教育の問題として、指導目標や評価の観点の不明確であり、児童生徒の学びの成果が見えにくいという指摘（文部科学省, 2005）と相まって、研修旅行の有効性について評価することは重要な課題であった。

こうした指摘を受け、海外への研修旅行の効果に関する検証が、すでに複数の先行研究によって行われている。相川（2007）は、国内外を修学旅行先とする高校生において、旅行前後における国際理解の変化を検討している。鈴木・坂本・森・坂本・高比良・足立・勝谷・小林・榎淵・木村（2000）の作成した国際理解尺度（IUS2000）を用いて検証した結果、研修旅行先として国内（九州）を選択した高校生に比べ、シンガポールへ旅行した生徒の「他国民・他民族に対する感情」ならびに「平等意識」が高まることを示すとともに、研修旅行群において、当該国に対するイメージの肯定的方向への変化を確認した。また藤原・飯田・甲斐・松本・日下部・鈴木・石隈（2015）は、シンガポ

ールを研修旅行先とした高校生を対象に、彼らが定義する国際的資質（異文化・自国文化理解、外国語コミュニケーション、他者との協同的問題解決能力ならびに海外・国際的交流への積極性の4つ）について、鈴木他（2000）の国際理解尺度を参考にしながら独自に尺度化を行い、その変化を検討した。その結果、外国人への親和性や自国に対する理解、外国文化への興味・関心、生徒本人が自覚する英語力や国際交流への積極性など、異文化理解や自国文化理解、コミュニケーションや積極性において、研修旅行後の得点上昇が認められた。その他、海外研修旅行に関する成果としては、インドネシア（石井・深澤・工藤・今野・石隈・飯田・甲斐・松本・大島, 2014）、台湾（石隈・深澤・工藤・石井・今野・甲斐・松本・飯田・藤原, 2014）、オーストラリア（飯田・石隈・甲斐・松本・深澤・工藤・石井・今野・藤原, 2014）の3ヶ国における研修旅行の成果が、それぞれ藤原他（2015）の国際的資質尺度によって検討されている。インドネシア渡航者においてはアサーション、台湾渡航者においては協同的問題解決能力、オーストラリア渡航者においては自国理解や英語力、外国人への親和性が、それぞれ向上していることが示されている。文部科学省（2005）は、英語圏諸国のみならず近隣のアジア諸国との交流促進の必要性を指摘しており、こうした先行研究は、アジア諸国への国際研修旅行の意義を示唆しているといえよう。

しかしながら、これら先行研究の知見が、特定の国や地域を訪れることを推奨したり、あるいは避けるように用いられるべきではない。藤原他（2015）においては、今後の研究課題として、研修旅行先として選ばれた国の違いに加え、特定の渡航先であってもそこで行われる研修内容の差異、さらに同一のプログラムにおいて生徒個人がどのような体験をし、それをどのように意味づけているのかについて検討する必要があることを指摘している。つまり、海外研修旅行が生徒全体の国際的資質を高めることを明らかにするだけでなく、生徒が持つ元々の国際的資質が海外渡航時の様々な異文化体験にどのような影響を与えるか、また生徒個人に着目し、同じ研修内容でも国際的資質の高まりやすい生徒とそうでない生徒の違いはどこにあるのかを明らかにする視点も必要であるといえる。より多くの異文化体験をもたらす国際的資質を明らかにすることができれば、旅行の事前学習で行うべきカリキュラムの編成や取り上げるべきトピックの選定に一定の示唆を与えることになろう。また研修旅行における国際

的資質向上の有無を個人レベルで検討することによって、個々の生徒に対するきめ細やかな研修旅行プログラムの計画立案が可能となろう。生徒の持つ多様性に沿ったプログラムの立案は、インクルーシブ教育の観点からも重要であり、これは今後の国際教育において重要な視点である。

以上より、本研究の目的は次の2点である。すなわち(1)海外研修旅行前の国際的資質が旅行時の異文化体験をどのように予測するかを明らかにするとともに、(2)旅行前後の国際的資質得点の変化に注目し、得点変化のパターンと旅行時の異文化体験の関連を明らかにすることである。以上2点を明らかにするために、①海外研修旅行において生徒が異文化体験を測定する尺度を開発するとともに、②研修旅行前の国際的資質が旅行後に回答する異文化体験の高さをどのように予測するかを明らかにするとともに、③旅行前後の国際的資質の変化と旅行時の様々な異文化体験の間の関連を検討する。

## 方 法

### 対象者

国立大学附属高校(単位制総合学科)に在籍する高校2年生158名を対象とした。

### 実践の内容

2014年11月に行われた海外研修旅行であった。生徒全員が下記調査前後においてオーストラリア、台湾、インドネシアのうち、本人が希望する1か国への国際研修旅行を経験した。オーストラリアについては、3泊5日の研修旅行のうち、2泊についてはモートン島タンガルーマにおいて野生のイルカへの餌付け、マリンアニマルプレゼンテーションのほか、オプションでデザートサファリ、シュノーケル、ブッシュタッカーウォーク、星空観察など自然や環境について体験および学習を行った。ゴールドコーストではオプションでツチボタルの鑑賞やファームステイを体験した。また、各自で決めた研究テーマで日豪の比較研究を行ったほか、生徒の希望をできるだけ尊重したプログラム作成を行った。台湾については4泊5日の校外学習のうち、最初の二日間は市内自由散策を行い、故宮や中正記念堂など歴史的な施設を訪問した。研修旅行後半は従来より調査対象校と国際交流実績のあったA高校の(台中市)生徒宅における2泊のホームステイを体験した。またA高校の授業にも参加し、両校の生徒が合同でグ

ループを作り、日本と台湾の文化をテーマにした出し物考えた。インドネシアについては4泊6日の日程のうち、3泊は調査校の姉妹校となっているB高校の生徒宅でのホームステイを行った。またグヌングデパンランゴ国立公園およびタマンサファリの視察や、絞り染めの体験をB高校の生徒とともに行った。各国への参加人数は、オーストラリアが119名(男子51名、女子68名)、台湾が27名(男子14名、女子13名)、インドネシアが12名(男子5名、女子7名)であった。

### 調査時期と方法

研修旅行の前後に、下記の内容を含む質問紙調査を実施した。調査実施にあたっては、学級担任による質問紙の配布、教示ならびに回収が行われた。

### 質問紙の構成と内容

**国際的資質を測定する尺度群** 藤原他(2015)の国際的資質を測定する4尺度を用いた。このうち「異文化への理解ならびに自国文化の理解尺度」については、「外国人への親和性」(4項目)、「自国理解」(2項目)、「多文化尊重」(5項目)、「外国文化へ興味・関心」(3項目)の4つの下位尺度から構成されている。計14項目について、5件法で回答を求めた。次に「外国語コミュニケーション能力尺度」については、「英語力」(2項目)、「他者理解」(3項目)、「アサーション」(2項目)、「興味・関心」(3項目)の計10項目について、5件法で回答を求めた。そして「他者との協同的問題解決能力尺度」(10項目)ならびに「海外・国際的交流への積極性尺度」(7項目)については、それぞれ1因子で構成されており、いずれも5件法で回答を求めた。

**異文化体験を測定する尺度** 海外経験において体験される内容について、心理学を専門とする大学教員2名が合議の上、独自の32項目を作成した。具体的には、現地で体験する買い物や公共交通機関の利用、現地の人々との交流に加え、外国語や現地の人々に対する意識などを項目として含めた(使用した32項目についてはTable 1を参照)。それぞれについて、「よく体験した」(4)、「やや体験した」(3)、「あまり体験しなかった」(2)、「全く体験しなかった」(1)の4件法で回答を求めた。

## 結 果

## 異文化体験尺度の尺度構成

異文化体験を測定する32項目について因子分析を行った。まず、主因子法による因子数の推定を行ったところ、固有値の減衰状況より2因子を採択した。プロマックス法による因子軸の回転を行うとともに、因子負荷量が.35に満たない項目や複数の因子に.30以上の負荷量を示した項目を削除して分析を繰り返したところ、Table 1に示す結果を得た。第2因子までの累積寄与率は37.10%であった。第1因子は、「帰ってきてから現地でお世話になった人とコンタクトをとった」や「現地の文化的施設（博物館、美術館）を訪れた」など、渡航先の人と連絡をとったり旅行先で文化施設や交通機関を利用した経験を尋ねる7項目から構成さ

れ、「研修旅行を通じた国際経験（以下、国際経験とする）」と命名された。第2因子は「海外で暮らすのも楽しそうだと感じた」や「違う文化を学び自分自身が成長したように感じる」など、渡航経験の楽しさや自分自身の成長感、再渡航の意欲等を尋ねる10項目から構成され、「研修旅行経験後の認識の変化（以下、認識の変化とする）」と命名された。各下位尺度についてCronbachの $\alpha$ を算出したところ、国際経験（ $\alpha = .83$ ）ならびに認識の変化（ $\alpha = .80$ ）のいずれも、十分な内的一貫性が認められた。

## 各尺度の記述統計量と旅行前後・男女差の比較

国際的資質を測定する4尺度ならびに異文化体験尺度について、男女別の記述統計量を算出した。国際的資質4尺度については男女差と旅行前後の変化を明ら

Table 1 異文化体験尺度の因子分析結果

	F1	F2	$h^2$	平均値	標準偏差
F1 研修旅行を通じた国際経験（ $\alpha = .83$ ）					
31 帰ってきてから現地でお世話になった人とコンタクトをとった	.86	-.06	.74	1.82	1.24
32 行く前に英語でメールのやりとりをした	.71	.08	.52	1.53	1.07
1 現地の文化的施設（博物館、美術館）を訪れた	.66	-.09	.44	2.11	1.14
7 ホームステイをした	.66	-.07	.43	2.27	1.45
4 現地の交通手段（バスや電車）を利用した	.64	-.05	.40	2.42	1.34
12 日本について話す機会があった	.52	.09	.28	2.57	1.25
5 両替をした	.48	.06	.24	2.28	1.31
F2 研修旅行経験後の認識の変化（ $\alpha = .80$ ）					
19 海外で暮らすのも楽しそうだと感じた	.01	.82	.68	3.19	0.97
27 また機会があったら海外に行きたい	.15	.64	.44	3.51	0.84
30 英語を使う機会があった	-.12	.59	.35	3.27	0.94
22 違う文化を学び自分自身が成長したように感じる	.18	.57	.37	3.03	0.87
28 海外留学にチャレンジしたい	.19	.55	.35	2.57	1.19
21 もっと英語が話せたらと感じた	-.04	.52	.27	3.56	0.83
17 自分が話した英語が通じた	-.11	.48	.24	3.25	0.86
18 同じ人間なんだと感じた	-.05	.43	.18	3.52	0.76
16 スーパーなど現地の生活空間に行く機会があった	-.28	.39	.22	3.80	0.49
15 帰ってきてから体験を家族に話した	-.07	.39	.16	3.52	0.75
除外された項目					
2 現地の学生となんらかの活動を共にした				1.95	1.27
3 現地の学生と趣味や個人的なことを話す機会があった				1.94	1.25
6 道を尋ねた				2.12	1.20
8 食事を注文した				3.25	0.99
9 現地の食事に挑戦した				3.60	0.77
10 現地の学校を訪れた				1.83	1.29
11 現地の人と会話をした				3.56	0.72
13 インターネットやガイドブックで現地の下調べをした				2.85	1.02
14 インターネットやガイドブックで現地の文化について調べた				2.69	1.09
20 パスポートや荷物の準備を自分で行った				3.73	0.50
23 もっと現地の人と接したかった				3.34	0.90
24 文化の違いを感じた				3.50	0.72
25 日本食が恋しくなった				3.41	0.97
26 自分が日本人であることを強く意識した				3.34	0.90
29 帰ってきてから体験をレポートにまとめた				2.24	1.04
	因子間相関		.05		

Table 2 国際的資質尺度の記述統計量

	n	事前		事後		分散分析結果					
		a	平均 (SD)	a	平均 (SD)	F	(df)	p	partial $\eta^2$	多重比較 (.05水準)	
外国人への親和性	70	.82	3.79 (0.91)	.84	3.79 (0.91)	前後	0.70	(1, 151)	ns	.01	男子 < 女子
	84		4.05 (0.88)		4.21 (0.77)	性差	6.64	(1, 151)	*	.04	
					交互作用	2.29	(1, 151)	ns	.02		
自国文化理解	70	.87	4.24 (0.92)	.90	4.36 (0.82)	前後	0.08	(1, 151)	ns	.00	(男子 < 女子)
	84		4.47 (0.75)		4.53 (0.68)	性差	2.96	(1, 151)	†	.02	
					交互作用	0.40	(1, 151)	ns	.00		
多文化尊重	70	.56	3.98 (0.64)	.65	3.91 (0.70)	前後	1.92	(1, 151)	ns	.01	男子 < 女子
	84		4.27 (0.63)		4.28 (0.59)	性差	13.26	(1, 151)	**	.08	
					交互作用	0.68	(1, 151)	ns	.00		
文化への興味関心	70	.66	2.91 (0.87)	.66	3.15 (0.80)	前後	0.32	(1, 151)	ns	.00	(男子 > 女子) (事後: 男子 > 女子) (男子: 事前 < 事後)
	84		2.77 (0.84)		2.81 (0.87)	性差	3.48	(1, 151)	†	.02	
					交互作用	3.03	(1, 151)	†	.02		
英語力	70	.77	2.28 (1.03)	.81	2.43 (1.16)	前後	0.14	(1, 151)	ns	.00	男子 > 女子 (事後: 男子 > 女子)
	84		2.05 (0.90)		2.01 (0.91)	性差	4.56	(1, 151)	*	.03	
					交互作用	2.81	(1, 151)	†	.02		
他者理解	70	.75	3.97 (0.67)	.72	3.95 (0.68)	前後	0.78	(1, 151)	ns	.01	男子 < 女子
	84		4.17 (0.68)		4.20 (0.59)	性差	5.31	(1, 151)	*	.03	
					交互作用	0.36	(1, 151)	ns	.00		
アサーション	70	.82	3.68 (0.94)	.83	3.64 (0.98)	前後	1.07	(1, 151)	ns	.01	
	84		3.55 (1.02)		3.57 (0.95)	性差	0.47	(1, 151)	ns	.00	
					交互作用	0.23	(1, 151)	ns	.00		
コミュニケーションへの興味・関心	70	.72	3.44 (0.98)	.75	3.39 (0.96)	前後	0.00	(1, 151)	ns	.00	
	84		3.33 (1.01)		3.35 (1.14)	性差	0.18	(1, 151)	ns	.00	
					交互作用	0.41	(1, 151)	ns	.00		
協同的問題解決能力	70	.88	3.83 (0.68)	.86	3.76 (0.64)	前後	0.34	(1, 151)	ns	.00	男子 < 女子
	84		4.02 (0.58)		4.01 (0.56)	性差	5.65	(1, 151)	*	.04	
					交互作用	0.66	(1, 151)	ns	.00		
海外・国際交流への積極性	70	.82	3.58 (0.81)	.81	3.61 (0.77)	前後	0.08	(1, 150)	ns	.00	男子 < 女子 (女子: 事前 < 事後) (事後: 男子 < 女子)
	83		3.74 (0.71)		3.94 (0.69)	性差	4.52	(1, 150)	*	.03	
					交互作用	3.82	(1, 150)	†	.03		

注) 上段：男子 下段：女子

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$ , † $p < .10$ , ns $p > .10$

Table 3 異文化体験尺度の記述統計量

	n	事前		事後		t 検定結果				
		平均	(SD)	平均	(SD)	t	(df)	p	d	
研修旅行を通じた国際経験	70	-	-	2.19	(0.89)	0.60	(155)	ns	.10	
研修旅行経験後の認識の変化	87	-	-	2.10	(0.89)					
研修旅行経験後の認識の変化	70	-	-	3.16	(0.56)	3.37	(155)	**	.55	男子 < 女子
	87	-	-	3.44	(0.44)					

注) 上段：男子 下段：女子

\*\* $p < .01$ , ns $p > .10$

かにするために2要因分散分析を (Table 2), 異文化体験尺度については男女差のt検定を実施した (Table 3)。その結果, 国際的資質尺度においては, 外国人への親和性 ( $F(1, 151)=6.64, p<.05, \text{偏}\eta^2=.04$ ), 多文化尊重 ( $F(1, 151)=13.26, p<.01, \text{偏}\eta^2=.08$ ), 英語

力 ( $F(1, 151)=4.56, p<.05, \text{偏}\eta^2=.03$ ), 他者理解 ( $F(1, 151)=5.31, p<.05, \text{偏}\eta^2=.03$ ), 協同的問題解決能力 ( $F(1, 151)=5.65, p<.05, \text{偏}\eta^2=.04$ ) ならびに海外・国際交流への積極性 ( $F(1, 150)=4.52, p<.05, \text{偏}\eta^2=.03$ ) において有意な男女差が認められ,

このうち英語力については男子の得点が女子より高く、それ以外の下位尺度については、女子の得点が男子より高かった。一方、事前と事後の得点における比較はいずれも有意とはならず、交互作用については一部下位尺度において有意傾向が認められた。このうち文化への興味関心 ( $F(1, 151)=3.03, p<.10, \text{偏}\eta^2=.02$ ) については、帰国後において男子の得点が女子の得点より高かったほか、男子において、帰国後の得点が旅行前の得点よりも高かった。英語力については ( $F(1, 151)=2.81, p<.10, \text{偏}\eta^2=.02$ ) については、旅行後において男子の得点が女真得点よりも高かった。そして海外・国際交流への積極性 ( $F(1, 150)=3.82, p<.10, \text{偏}\eta^2=.03$ ) については、女子において帰国後の得点が旅行前の得点よりも高かったほか、旅行後において、女子の得点が男子よりも高かった。異文化体験尺度については、認識の変化において有意差が認められ、女子の得点が男子の得点よりも有意に高かった ( $t(155)=3.37, p<.01, d=.55$ )。

#### 下位尺度間の関連

各下位尺度間の関連を明らかにするため、相関係数を算出した (Table 4)。その結果、旅行前後のデータに共通して、外国人への親和性とコミュニケーションへの興味関心 (旅行前, 旅行後の順に,  $r=.51, r=.52$ , いずれも  $p<.01$ ) ならびに海外・国際交流への積極性 ( $r=.58$ と $r=.70$ , いずれも  $p<.01$ )、協同的問題解決と自国理解 ( $r=.44$ と $r=.43$ , いずれも  $p<.01$ ) ならびに多文化尊重 ( $r=.46$ と $r=.47$ , いずれも  $p<.01$ )、コミュニケーションへの興味関心と海外・国際交流への積極性 ( $r=.64$ と $r=.56$ , いずれも  $p<.01$ ) の間に、中程度以上の有意な正の相関が認められた。また国際的資質尺度における旅行前後の比較では、同一変数間の旅行前後の相関はいずれも中程度以上であり ( $r=.81$ から $.58$ , いずれも  $p<.01$ )、ほとんどの下位尺度において強い正の関連を有することが明らかとなった。

異文化体験尺度のうち、国際経験については、国際的資質尺度の文化への興味関心 (旅行前は  $r=.20, p<.05$ , 旅行後は  $r=.24, p<.01$ ) ならびに旅行後のコミュニケーションへの興味関心 ( $r=.12, p<.05$ ) であったが、いずれも弱い正の関連に留まった。一方認識の変化については国際的資質尺度のほぼすべての下位尺度と有意な正の関連が認められた。特に旅行前における外国人への親和性 ( $r=.60, p<.01$ )、コミュニケーションへの興味関心 ( $r=.46, p<.01$ )、協同的問題解決能力 ( $r=.51, p<.01$ )、海外・国際交流への積極

性 ( $r=.51, p<.01$ ) と中程度の正の関連を有していたほか、旅行後のデータにおいても、外国人への親和性 ( $r=.60, p<.01$ )、多文化尊重 ( $r=.43, p<.01$ )、コミュニケーションへの興味関心 ( $r=.44, p<.01$ )、協同的問題解決能力 ( $r=.50, p<.01$ )、海外・国際交流への積極性 ( $r=.68, p<.01$ ) と中程度の正の関連を有していた。

#### 異文化体験に与える国際的資質の影響

旅行後の異文化体験に与える研修旅行前の国際的資質の影響を検討するため、階層的重回帰分析を行った。独立変数のStep 1に性別 (男子を1, 女子を2とダミー変数化) ならびに渡航先 (オーストラリアを1, 台湾を2, インドネシアを3とダミー変数化) を、Step 2に国際的資質の10下位尺度を投入した。その結果、国際経験に対しては、Step 2に対する $R^2$ の有意な増加が認められなかった ( $\Delta R^2=.03, ns$ )。一方、認識の変化については、Step 2に対する $R^2$ の有意な増加が認められ ( $\Delta R^2=.44, p<.01$ )、外国人への親和性 ( $\beta=.31, p<.01$ )、コミュニケーションへの興味関心 ( $\beta=.17, p<.05$ ) ならびに協同的問題解決能力 ( $\beta=.27, p<.01$ ) について、認識の変化と有意な正の関連を有することが明らかとなった (Table 5)。

#### 国際的資質の変化に見る異文化体験の差異

研修旅行前後の国際的資質変化の個人差と異文化体験の関連を明らかにするため、次の分析を行った。まず国際的資質10下位尺度について、事後の尺度得点から事前の尺度得点を減じ、差得点を算出した。次に、算出された10の差得点について、Word法によるクラス分析を実施した。解釈可能性の最も高い4クラス解を採択したが、このうち1つのクラスタについては人数が3名と少なかったため以降の分析からは除外した (各群の人数について、男女別および渡航先別に Table 6に示した)。

第1クラスタ ( $n=48$ ) は、文化への興味関心得点は上昇したものの、親和性や多文化理解、他者理解やアサーションなど、旅行後の国際的資質得点に有意な低下が認められたため、「海外嫌い群」と命名された。第2クラスタ ( $n=41$ ) は、文化への興味関心得点が上昇したものの、英語力やコミュニケーションへの興味関心、海外・国際交流への積極性得点が有意に低下しており、「語学の壁群」と命名された。第3クラスタ ( $n=63$ ) は、異文化への理解ならびに自国文化の理解尺度の全下位尺度や英語力、海外・国際交流への

Table 4 相関係数行列

	旅行前										旅行後											
	国際的資質尺度										国際的資質尺度										異文化体験尺度	
	自国理解	多文化尊重	文化への興味関心	英語力	他者理解	アサーション	コミュへの興味関心	協同的問題解決	積極性	親和性	自国理解	多文化尊重	文化への興味関心	英語力	他者理解	アサーション	コミュへの興味関心	協同的問題解決	積極性	国際経験	認識の変化	
旅行前																						
外国人への親和性	.27**	.35**	.34**	.39**	.32**	.43**	.51**	.39**	.58**	.76**	.20*	.33**	.21**	.35**	.26**	.41**	.49**	.38**	.63**	.04	.60**	
自国理解		.20*	.19*	.16*	.24**	.11	.13	.44**	.21**	.20*	.73**	.20*	.12	.14'	.27**	.16'	.14'	.39**	.19*	-.01	.27**	
多文化尊重			.20*	.11	.23**	.17*	.20*	.46**	.24**	.38**	.20*	.58**	.01	.13	.16*	.19*	.22**	.32**	.26**	.08	.33**	
文化への興味関心				.33**	.24**	.33**	.34**	.34**	.26**	.28**	.07	.15'	.68**	.30**	.23**	.28**	.26**	.32**	.26**	.20*	.34**	
英語力					.15'	.44**	.51**	.19*	.40**	.30**	.09	.05	.38**	.77**	.18*	.38**	.44**	.15'	.34**	-.01	.29**	
他者理解						.41**	.21**	.47**	.32**	.30**	.20*	.31**	.12	.20*	.65**	.37**	.14'	.32**	.31**	-.05	.34**	
アサーション							.30**	.23**	.32**	.28**	.14'	.14'	.27**	.39**	.23**	.72**	.20*	.19*	.27**	.00	.25**	
コミュへの興味関心								.23**	.64**	.57**	.16*	.21**	.39**	.47**	.33**	.26**	.81**	.22**	.57**	.08	.46**	
協同的問題解決									.36**	.39**	.39**	.43**	.17*	.19*	.37**	.26**	.19*	.75**	.35**	.03	.51**	
積極性										.62**	.14'	.32**	.29**	.35**	.31**	.29**	.54**	.38**	.74**	-.03	.51**	
旅行後																						
外国人への親和性										.20*	.46**	.18*	.29**	.32**	.31**	.52**	.38**	.70**	.01	.68**		
自国理解											.25**	.02	.11	.24**	.14'	.21**	.43**	.21**	.07	.22**		
多文化尊重												-.01	.05	.26**	.15'	.28**	.47**	.36**	-.03	.43**		
文化への興味関心														.33**	.17*	.23**	.33**	.12	.18*	.24**		
英語力														.16*	.36**	.38**	.10	.33**	-.01	.32**		
他者理解															.39**	.28**	.39**	.32**	.03	.37**		
アサーション																.15'	.21**	.25**	-.01	.33**		
コミュへの興味関心																	.30**	.56**	.12**	.44**		
協同的問題解決																		.43**	.06	.50**		
積極性																			.04	.68**		
国際経験																				.02		

注) コミュへの興味関心: コミュニケーションへの興味関心。( )内は人数を表す。 \*\*p&lt;.01, \*p&lt;.05, 'p&lt;.10

Table 5 認識の変化を従属変数とした重回帰分析結果

	平均	SD	従属変数とのr	B	$\beta$	B	$\beta$
認識の変化	3.32	0.52					
Step 1							
性別	1.54	0.50	.28**	.28	.27	.20	.19
渡航先	1.32	0.61	-.06	-.05	-.05	-.04	-.05
Step 2 (Time 1の国際的資質)							
外国人への親和性	3.93	0.90	.60**			.18	.31**
自国理解	4.36	0.84	.27**			-.01	-.02
多文化尊重	4.13	0.65	.33**			.00	-.01
文化への興味関心	2.83	0.85	.34**			.05	.09
英語力	2.15	0.97	.29**			.01	.01
他者理解	4.09	0.68	.34**			.02	.02
アサーション	3.61	0.98	.25**			-.03	-.05
コミュニケーションへの興味関心	3.39	0.99	.46**			.09	.17*
協同的問題解決能力	3.94	0.63	.51**			.22	.27**
海外・国際交流への積極性	3.66	0.76	.51**			.05	.08
			R		.28		.72
			R <sup>2</sup>		.08		.52**
			$\Delta R^2$				.44**

\*\*p<.01, \*p<.05

性別 (1を男子, 2を女子) ならびに渡航先 (1をオーストラリア, 2を台湾, 3をインドネシア) は, それぞれダミー変数化して投入

Table 6 各群の人数 (男女・地域別)

	海外嫌い群		言葉の壁群		海外への好感群	
	男子	女子	男子	女子	男子	女子
オーストラリア	22	13	15	18	12	34
台湾	4	1	2	5	8	5
インドネシア	2	4	0	1	3	1

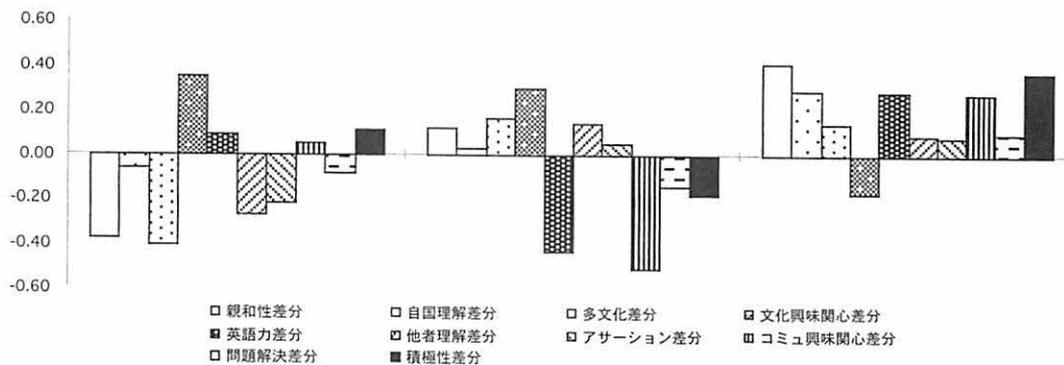


Figure 1 国際的資質差得点を用いたクラスタ分析結果

積極性等多くの下位尺度得点の上昇が認められ, 「海外への好感群」と命名された (クラスタ分析結果は Figure 1, 各群の得点比較及び得点変化の詳細については Appendix 参照)。これら 3 群の異文化体験尺度の比較を行うため, 1 要因の分散分析を行った。その結

果, 認識の変化下位尺度において有意差が認められた ( $F(2, 147)=3.31, p<.05, \text{偏}\eta^2=.02$ )。多重比較の結果, 海外嫌い群よりも海外への好感群の方が, 認識の変化得点が高かった (Table 7)。

Table 7 クラス間における異文化体験尺度の差の検討

	n	海外嫌い群	言葉の壁群	海外への好感群	ANOVA結果			
		46	41	63	(df)	F	partial $\eta^2$	
国際経験	平均 (SD)	2.24 (0.89)	1.93 (0.83)	2.19 (0.89)	(2, 147)	1.62	.02	ns
認識の変化	平均 (SD)	3.19 (0.55)	3.28 (0.52)	3.44 (0.47)	(2, 147)	3.31	.04	p<.05 海外嫌い群 < 海外への好感群

## 考 察

本研究の目的は、(1) 海外研修旅行前の国際的資質が旅行時の異文化体験をどのように予測するかを明らかにすることと、(2) 旅行前後の国際的資質得点の変化に注目し、得点変化のパターンと旅行時の異文化体験の関連を明らかにすることであった。本項では、上記2点の目的に対する考察を行うとともに、本研究の限界と今後の課題について触れる。

### 異文化体験尺度の作成

国際的資質が異文化体験をどのように予測するかを明らかにするかを検討する前提として、本研究では異文化体験尺度を作成した。当初想定した30項目に対して探索的因子分析を行った結果、研修旅行を通じて経験した事柄そのものと、研修旅行を通じて感じた意欲の高まりや成長感を尋ねる2因子が抽出された。いずれも十分な内的一貫性を有することが確認されたほか、後者については、中程度の効果量をもって女子の得点が男子の得点よりも高かった。鈴木他(2000)の国際理解測定尺度においても、多くの下位尺度において女子の得点の高さが指摘されている。また本研究で分析した国際的資質尺度の性差においても、外国人への親和性や国際交流への積極性などの交流に対する意欲、また他者理解や協同的問題解決能力など、コミュニケーション能力や対人関係スキルにおいて、女子の得点の高さが確認された。こうした国際交流に対する意欲やコミュニケーション能力における性差が、外国での国際交流における積極的な体験に影響していることも考えられる。

### 旅行前の国際的資質と旅行時の異文化体験の関連

旅行前の国際的資質が旅行時の異文化体験をどのように予測するかを検討した。性別および旅行先を統制した重回帰分析を行った結果、国際的資質の中でも、特に外国人への親和性、コミュニケーションへの興味・関心、そして協同的問題解決能力が、旅行後の海

外経験に対する意欲の高まりや成長感を促進することが示された。本研究においては、英語力やアサーションなど、実質的な外国語コミュニケーション・スキルを含めて調査を行ったが、体験を高める変数として挙げられたのはコミュニケーションへの「興味・関心」であった。何かトラブルがあった時に他者と協同して問題を解決する能力が重要であることはさることながら、実質的なコミュニケーション・スキルではなく、外国人への親和性や関わりを持ちたいという意欲が、国際研修旅行時の体験をより高めることは示唆に富む結果である。もちろん、本研究は高校生を対象とした研究であり、成人や就業者を対象とした場合には、実際に現地語が話せることはより重要となろう。しかしながら、高校生段階にあっても旅行前の関心や意欲が現地での経験を左右する結果は、英語を中心とした語学力向上を重視する国際教育に一石を投じるものであろう。「英語活動の実施すなわち国際理解という誤解」(文部科学省, 2005)という指摘の通り、より広い観点からの授業実践の重要性が、本研究の結果からも指摘できよう。

一方で、旅行前の国際的資質は、現地の交通機関や公的機関を利用したり、旅行前後に行われる先方とのやり取りといった、国際経験そのものとの関連は認められなかった。既存の計画に沿った研修旅行プログラムは、生徒にとって受動的であったのかもしれない。現地での活動について生徒自身が計画立案するなど、生徒がより主体的に参加できるプログラム作成等によって、旅行時の体験が質的及び量的に変化することも考えられる。一方で、本質的な問題として、国際的資質は研修プログラムの内容にかかわらず、異文化体験そのものに影響を与えないのかもしれない。この点は今後の検討課題であろう。

### 国際的資質の変化の様相と異文化体験の関連

生徒個人の国際的資質の変化についての類型が異文化体験とどのように関連するかを明らかにするため、旅行前後の国際的資質の差得点を用いてクラス分析

を実施した。その結果、旅行後に外国人への親和性や多文化尊重の得点が減少した「海外嫌い群」、英語力やコミュニケーションに対する興味・関心が減少した「語学の壁群」、そして多くの下位尺度において得点上昇が認められた「海外への好感群」の3群が見いだされた。また、これら3群はおおよそ均等な人数比となり、約4割の生徒に旅行後の国際的資質得点の向上が認められたのに対し、3割の生徒においては外国人や多文化尊重に対する得点が減少するとともに、残りの3割についても、外国語コミュニケーションの得点が低下していた。本研究の結果、全ての生徒が一律に国際的資質を高めるわけではないことが示され、研修旅行全体の参加者を対象とした先行研究とは異なる知見が得られた。国際研修旅行の成果を検討する際には、全体の成果を強調することはもちろんのこと、本研究のように個人に焦点を当てた有効性の検証も、一定の意義を有すると考えられる。

クラスタ分析の結果、外国語コミュニケーションに関する困難さを感じた生徒が一定数見いだされた。高校生を対象とした調査(文部科学省, 2015)において、留学時にやってみたいこととして最も多かった回答が「語学力を向上させたい」(62%)であったが、一方で留学したいと思わない理由について最も多かったのが「言葉の壁」(54%)であった。すべての参加者を対象とした重回帰分析の結果では、旅行時の異文化体験の豊かさを予測する事前の国際的資質として語学力そのものよりも興味関心や意欲が挙げられていたが、旅行前後の国際的資質得点の増減を個人レベルで検討すると、研修旅行前後で語学力の問題を認める個人が一定数存在することが明らかとなった。本研究の調査はすべて自己報告によるため、実際に語学力が低下したと考えるよりも、むしろ自身が感じていた語学力と海外で必要とされる語学力にギャップを感じたと解釈することが妥当であろう。このように語学の壁を感じて帰国した一定数の生徒が、その後の語学学習に対してどのような関心や意欲を持ち、学習に取り組んでいるかを検討することも重要であろう。堀田・杉江(2013)は、挫折体験をどのように意味づけるかによってその後の成長に与える影響の差異を検討している。その中で、挫折体験について、自身が持つ世界観や自己感に一致するように出来事を再解釈したり(同化)、その出来事によって示唆された新しい情報を取り入れるように自身の世界観や自己感を変化させること(調節)を通じて、前向きな変化がもたらされることを明らかにしている(堀田・杉江, 2013)。以上より、研修旅

行前に外国語に対する興味関心を高めておくことはもちろんのこと、生徒が帰国後に感じる理想と現実のギャップをどのように受け止めるかについて検討するとともに、教師が各個人の捉え方の多様性を理解し、体験の意味づけや捉え直しをどのように導くかに関する指導方法の開発も、重要な課題であると考えられる。

また、クラスタ分析によって見出された3群の異文化体験尺度得点を比較したところ、旅行後の認識の変化得点に有意差が認められ、海外嫌い群に比べて、国際的資質得点の上昇が認められた好感群における認識の変化得点が高いことが明らかとなった。国際的資質の上昇群においては、異文化体験尺度の内容にあるように、再渡航の意欲、積極性や成長感など、海外経験をポジティブに意味づけていると考えられる。

ただし、本研究の結果からは、海外への好感群に属する個人が、どのような点で国際的資質を向上させたのかについて、本研究の結果のみで議論することは不十分である。各クラスタにおける国際的資質得点の分散分析の結果、全ての下位尺度において交互作用が認められ(Appendix参照)、特に複数の尺度において、旅行後の国際的資質得点に群間差が認められた。旅行前の国際的資質に大きな差が認められていないことから、海外経験を成長の機会と捉えることができる個人とそうでない個人の間、パーソナリティや対人動機、外国人や外国文化との交流経験の有無など、何らかの個人差が想定されるが、これらについては検討が行われていない。国際研修旅行の前には旅行に関連するかどうかにかかわらず、様々な国際教育が行われているが、こうした国内で行われる事前学習の有効性を明らかにするとともに、心理的変数についても併せて検討を行うことが必要であろう。

#### 本研究の限界と今後の課題

最後に本研究の限界と今後の課題についてまとめる。本研究で得られたデータは国立大学附属高校1校に通う高校生を対象としたものであり、本研究で得られた知見の一般化には慎重を期す必要がある。また異文化体験尺度について、因子構造の頑健性や信頼性・妥当性については、今後十分な検討が必要であろう。しかしながら、各校が実施する多様な研修プログラムについて、研究の都合上渡航先や研修プログラム等関連が想定される変数をすべて統制することは困難である。本研究で得られた知見を教育活動へ応用する際には、研究方法論上の問題点と限界について把握し、また渡航先や研修内容を理解した上で行う必要がある。

また、本研究で得られた一部の結果については、有意差は認められたものの、その効果量は小さかった。この点を考慮すると、本研究で得られた結果は、海外研修旅行の有用性は示したものの、その有効性の大きさについては十分とは言い難い。文部科学省（2005）が指摘するように、国際教育充実を目的として、各教科の相互関連性を意識したカリキュラム編成、学習内容・方法等の開発と普及やICT技術の活用などの授業づくりや教師の実践力向上など、直接的な異文化体験以外の様々な方策が挙げられている。研修旅行に限らず、学校内で行われる国際交流の取り組みに関する効果検証も散見されるが（飯田・佐野・林・新津・甲斐・松本・今井・藤原，2015），今後更に実践と検証を蓄積する必要があるだろう。

#### 引用文献

- 相川 充（2007）. 高校生の海外修学旅行が訪問国に対するイメージと国際理解に及ぼす効果 東京学芸大学紀要総合教育科学系, 58, 81-90.
- 藤原 健志・飯田 順子・甲斐 雄一郎・松本 末男・日下部 公昭・鈴木 亨・石隈 利紀（2015）. 高校生の国際研修旅行経験による国際的資質の向上 筑波大学学校教育論集, 37, 19-28.
- 堀田 亮・杉江 征（2013）. 挫折体験の意味づけが自己概念の変容に与える影響 心理学研究, 84, 408-418.
- 飯田 順子・石隈 利紀・甲斐 雄一郎・松本 末男・深澤 孝之・工藤 泰三・石井 克桂・今野 良祐・藤原 健志（2014）. 海外研修旅行が国際理解の向上に及ぼす影響(2) ～「オーストラリア」を選択した生徒の経験について～ 日本学校心理学会第16回大会発表論文集, 49.
- 飯田 順子・佐野 一郎・林 貴美子・新津 勝二・甲斐雄一郎・松本 末男・今井 二郎・藤原 健志（2015）. 児童生徒の国際的資質を育成する実践：『ヤングアメリカンズワークショップ』を通じた附属学校の児童生徒の変化 筑波大学学校教育論集, 37, 1-10.
- 石井 克桂・深澤 孝之・工藤 泰三・今野 良祐・石隈利紀・飯田 順子・甲斐 雄一郎・松本 末男・大島 由之（2014）. 海外研修旅行が国際理解の向上に及ぼす影響(4) ～「インドネシア」を選択した生徒の経験について～ 日本学校心理学会第16回大会発表論文集, 51.
- 石隈 利紀・深澤 孝之・工藤 泰三・石井 克桂・今野良祐・甲斐 雄一郎・松本 末男・飯田 順子・藤原 健志（2014）. 海外研修旅行が国際理解の向上に及ぼす影響(3) ～「台湾」を選択した生徒の経験について～ 日本学校心理学会第16回大会発表論文集, 50.
- 文部科学省（2005）. 初等中等教育における国際教育推進検討会報告～国際社会を生きる人材を育成するために～ 文部科学省 2005年8月3日 <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/shotou/026/houku/05080101/all.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/houku/05080101/all.pdf)>（2014年11月1日）
- 文部科学省（2012）. 平成23年度高等学校等における国際交流等の状況について 文部科学省 2013年10月9日 <[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/fieldfile/2013/10/09/1323948\\_02\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2013/10/09/1323948_02_1.pdf)>（2014年11月1日）
- 文部科学省（2015）. 平成25年度高等学校等における国際交流等の状況について 2015年4月9日 <[http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/fieldfile/2015/04/09/1323948\\_03\\_2.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/fieldfile/2015/04/09/1323948_03_2.pdf)>（2015年10月19日）
- 鈴木 佳苗・坂本 章・森 津太子・坂本 桂・高比良 美詠子・足立 にか・勝谷 紀子・小林 久美子・樺淵 めぐみ・木村 文香（2000）. 国際理解測定尺度（IUS2000）の作成及び信頼性・妥当性の検討 日本教育工学雑誌, 23, 213-226.
- 全国修学旅行研究協会（2013）. 平成24年度（2012）全国公立高等学校海外修学旅行・海外研修（修学旅行外）実施状況調査報告 平成25年10月 <<http://shugakuryoko.com/chosa/kaigai/index.html>>（2014年10月31日）
- 全国修学旅行研究協会（2014）. 平成25年度（2013）全国公立高等学校海外修学旅行・海外研修（修学旅行外）実施状況調査報告 2014年10月 <<http://shugakuryoko.com/chosa/kaigai/2013-01-hyoushi.pdf>>（2015年10月26日）

#### 付記

本研究は、平成24年度から平成26年度にかけて行われた筑波大学附属学校教育局プロジェクト研究「国際的資質を育てる実践」の成果の一部である。また本研究の一部は、日本カウンセリング学会第48回大会において発表された。

Appendix 各クラスおよび旅行前後における国際的資質得点の比較

群	n	海外嫌い群 <sup>a</sup>		言葉の壁群 <sup>b</sup>		海外への好感群 <sup>c</sup>		ANOVA結果					
		46		41		63			(df)	F	partial $\eta^2$	多重比較 交互作用	
		旅行前 <sup>1</sup>	旅行後 <sup>2</sup>	旅行前 <sup>1</sup>	旅行後 <sup>2</sup>	旅行前 <sup>1</sup>	旅行後 <sup>2</sup>						
外国人への 親和性	平均	4.03	3.66	3.90	4.02	3.86	4.27	旅行前後	(1, 147)	1.29	.01	2: c > a	a: 1 > 2
	(SD)	(0.95)	(0.99)	(0.91)	(0.83)	(0.86)	(0.69)	クラス	(2, 147)	0.92	.01		c: 1 < 2
								交互作用	(2, 147)	29.25**	.29		
自国理解	平均	4.34	4.27	4.41	4.44	4.38	4.67	旅行前後	(1, 147)	3.15	.02	2: c > a	c: 1 < 2
	(SD)	(0.84)	(0.74)	(0.93)	(0.85)	(0.79)	(0.57)	クラス	(2, 147)	1.21	.02		
								交互作用	(2, 147)	5.95**	.08		
多文化尊重	平均	4.14	3.74	3.94	4.10	4.26	4.40	旅行前後	(1, 147)	0.58	.00	c > a, b	
	(SD)	(0.63)	(0.63)	(0.64)	(0.66)	(0.63)	(0.56)	クラス	(2, 147)	7.29**	.09	1: c > b	a: 1 > 2
								交互作用	(2, 147)	16.53**	.18	2: c > a, b	c: 1 < 2
文化への 興味関心	平均	2.87	3.22	2.72	3.02	2.90	2.72	旅行前後	(1, 147)	8.91**	.06	2 > 1	a: 1 < 2
	(SD)	(0.77)	(0.81)	(0.88)	(0.80)	(0.89)	(0.88)	クラス	(2, 147)	1.23	.02	2: a > c	b: 1 < 2
								交互作用	(2, 147)	11.80**	.18		c: 1 > 2
英語力	平均	2.37	2.46	2.33	1.89	1.88	2.16	旅行前後	(1, 147)	0.27	.00	1: a > c	b: 1 > 2
	(SD)	(1.04)	(1.12)	(0.96)	(0.91)	(0.87)	(1.01)	クラス	(2, 147)	2.41	.03	2: a > b	c: 1 < 2
								交互作用	(2, 147)	19.69**	.21		
他者理解	平均	4.14	3.86	3.98	4.12	4.14	4.22	旅行前後	(1, 147)	0.17	.00	2: c > a	a: 1 > 2
	(SD)	(0.69)	(0.67)	(0.76)	(0.69)	(0.61)	(0.56)	クラス	(2, 147)	1.29	.02		
								交互作用	(2, 147)	8.98**	.11		
アサーション	平均	3.92	3.71	3.50	3.55	3.48	3.56	旅行前後	(1, 147)	0.27	.00	a: 1 > 2	
	(SD)	(0.94)	(0.96)	(0.95)	(1.01)	(1.02)	(0.94)	クラス	(2, 147)	1.65	.02		
								交互作用	(2, 147)	2.69**	.04		
コミュ 興味関心	平均	3.38	3.43	3.62	3.11	3.24	3.51	旅行前後	(1, 147)	1.77	.01	b: 1 > 2	
	(SD)	(1.01)	(1.05)	(0.94)	(1.11)	(1.00)	(1.01)	クラス	(2, 147)	0.03	.00	c: 1 < 2	
								交互作用	(2, 147)	24.67**	.25		
協同的 問題解決	平均	3.88	3.79	3.87	3.72	4.04	4.13	旅行前後	(1, 147)	1.67	.01	c > b	b: 1 > 2
	(SD)	(0.60)	(0.55)	(0.65)	(0.66)	(0.63)	(0.50)	クラス	(2, 147)	4.25*	.06	2: c > a, b	
								交互作用	(2, 147)	4.71*	.06		
積極性	平均	3.62	3.72	3.87	3.69	3.54	3.91	旅行前後	(1, 147)	5.88*	.02	2 > 1	b: 1 > 2
	(SD)	(0.91)	(0.87)	(0.71)	(0.76)	(0.63)	(0.61)	クラス	(2, 147)	0.28	.00	c: 1 < 2	
								交互作用	(2, 147)	16.25**	.18		

\*\*p<.01, \*p<.05.

注) 多重比較・交互作用欄においては, a: 海外嫌い群, b: 言葉の壁群, c: 海外への好感群, 1: 旅行前, 2: 旅行後, をそれぞれ示す。  
 コミュ興味関心: コミュニケーションへの興味・関心, 積極性: 海外・国際交流への積極性